

https://farid.ps/articles/gaza_humanitarian_foundation_a_dystopian_killing_machine/ja.htm

ガザ人道財団：ディストピアの殺戮マシン

1976年のSF映画『ローガンの脱走』(Logan's Run)、ウィリアム・F・ノーランとジョージ・クレイトン・ジョンソンの1967年の小説を原作としたこの作品では、ディストピア社会が「カルーセル」と呼ばれる儀式を強制し、30歳に達した市民は再生を約束する公開スペクタクルに参加させられますが、それは死を意味します。このメカニズムは、若者に道を譲るために高齢者を排除することで社会的バランスを維持し、選択と救済の幻想で覆われています。恐ろしい類似性として、2025年2月にガザでの援助配布を目的として設立されたガザ人道財団(GHF)は、現代のカルーセルに例えることができます。すなわち、人道支援を装いながら、パレスチナ人を致命的な試練に晒し、生存のための危険な賭けに強制しつつ、より広範な政治的・軍事的目標に奉仕するシステムです。このエッセイは、『ローガンの脱走』の視点を通じてGHFの活動を探り、その援助配布モデルとディストピアのカルーセルとの類似性を描き出し、援助の軍事化、受給者の非人間化、そしてそれがもたらすシステム的支配を強調します。

救済の幻想：カルーセルとGHFの約束

『ローガンの脱走』では、カルーセルは自発的な再生の行為として提示され、市民がより高い存在状態に昇華する機会とされています。しかし、真実は残酷です。参加者は蒸発させられ、彼らの死は残りの人口のための資源配分を確保します。同様に、アメリカとイスラエル政府に支援されたGHFは、人道的ライフラインとして自らを売り込み、ハマスの干渉を回避しながらガザの民間人に直接援助を提供すると主張しています。5週間で5200万食以上を提供したと誇り、イスラエルの封鎖によるガザの飢饉のような状況への解決策としてその活動を位置づけています。しかし、カルーセルのように、この約束は暗い現実を隠しています。2025年5月末から運用されているGHFの援助配布システムは、オックスファムやセーブ・ザ・チルドレンを含む170以上のNGOから「人道的対応ではない」と非難され、命を危険に晒すメカニズムとされています。

GHFのモデルでは、パレスチナ人は軍事化されたゾーンを長距離移動し、厳重に警備された少數の配布拠点に到達する必要があります。多くの場合、イスラエル軍や民間請負業者の銃撃の下でです。報告によると、これらの拠点で援助を求める間に613人以上のパレスチナ人が殺され、4200人以上が負傷し、生存者たちはこれらを「救援ハブ」ではなく「死の罠」と呼んでいます。これはカルーセルの偽りの希望を反映しており、参加者は再生の可能性に誘われて最終的に絶滅に直面します。GHFの援助は、表面上は命を救うものですが、致命的な誘惑となり、ガザの人々に絶望的な選択を強います。飢えるか、わずかな食料を得るために死のリスクを冒すかです。

軍事化と支配：カルーセルの仕組み

『ローガンの脱走』では、カルーセルは秩序と服従を維持するために都市の当局によって厳密に管理されたスペクタクルです。GHFの援助配布も同様に、イスラエル軍と米国を拠点とする民間警備請負業者（例：セーフ・リーチ・ソリューションズ）による厳格な軍事監督の下で運営されています。この軍事化は、国連やアムネスティ・インターナショナルなどの組織が指摘するように、中立性、公平性、独立性という人道支援の基本原則に違反しています。ガザの国境と援助の流れを管理するイスラエル当局とのGHFの連携は、人道支援を軍事戦略の道具に変え、カルーセルがディストピア体制の人口管理に奉仕するのと同様です。

GHFの集中型配布ハブ—ガザの南部と中央に4つの拠点—は、カルーセルの単一の管理されたアーニナを反映しています。これらのハブは、有刺鉄線や監視ポイントに囲まれ、パレスチナ人を狭い軍事化された区域に集約するよう設計されており、監視と支配を容易にします。国境なき医師団などの批判者は、このシステムを「援助を装った虐殺」と表現し、数千人が限られた物資を求めて争う混沌とした配布で、しばしば大規模な死傷者が出るとしています。この設定は、群衆の絶望がスペクタクルを煽り、システム的暴力を隠すカルーセルの計画された混乱を彷彿とさせます。

さらに、GHFの活動は、一部の人道団体がパレスチナ人の移住を目的としていると非難するイスラエルのより広範な目標と一致しています。援助をガザ南部に限定し、北部の住民に危険な旅を強いることで、GHFは移住を悪化させ、カルーセルが社会的「バランス」を維持するためには余剰人口を排除するのと並行します。国連はこのモデルを「非人間的」と非難し、ガザの広範なニーズに対応できないと指摘し、カルーセルが個人の命よりもシステムの安定を優先するのと同様です。

非人間化と絶望：参加者の苦境

『ローガンの脱走』では、カルーセルの参加者は人間性を剥奪され、彼らの命が不要とされる儀式の中で顔のない存在に還元されます。同様に、GHFの援助システムはパレスチナ人を非人間化し、尊厳ある個人ではなく脅威として扱います。GHFの元請負業者は、ガードがガザの人々を「ゾンビの群れ」と呼び、実弾、スタングレネード、催涙スプレーで群衆に発砲する文化を報告しました。この言葉と行動は、カルーセル参加者を単なる機械の歯車と見なす『ローガンの脱走』の執行者の冷淡さを反映しています。

GHFの配布プロセスは、この非人間化をさらに悪化させます。女性、子供、高齢者を含むパレスチナ人は、拠点に到達するために何キロも歩かなければならず、そこで暴力と混乱に直面します。避難民の母親、サマハ・ハムダンさんは、こぼれたパスタを集めるために9マイル歩いたと語り、そのプロセスの屈辱を強調しました。カルーセルの参加者が生存のためにパフォーマンスを強いられるように、ガザの人々は食料の欠片のために命を危険に晒す屈辱的なスペクタクルに強制されます。国連の人権責任者、フォルカー・ターク氏は、このシステムを「許しがたい」と呼び、市民を危険に晒すことで国際法に違反していると強調しました。

より広範なディストピアの枠組み：権力と服従

『ローガンの脱走』のカルーセルは、人口管理の道具であるだけでなく、体制が生と死を決定する権力の象徴でもあります。GHFも同様に、イスラエルとその米国支援者がガザの人道環境を再構築することを可能にする権力の道具として機能します。UNRWAや世界食糧計画などの確立された援助機関を脇に追いやり、GHFは数十年にわたる人道インフラを損ない、代わりに政治化され軍事化されたモデルを導入します。これは、ディストピア体制が個人の主体性を消し去り、単一の管理されたシステムへの服従を強制するのと一致します。

GHFの指導者には、トランプの顧問で福音派や親イスラエルアジェンダとつながりのあるジョン・ムーア牧師などの人物が含まれ、その政治的連携を強化しています。杰イク・ウッドが中立性への懸念から辞任した後のムーアの任命は、明確な政治化へのシフトを示し、『ローガンの脱走』の体制のイデオロギー的基盤と似ています。GHFの不透明な資金調達と透明性の欠如は、ディストピア都市の秘密裏の策略をさらに反映し、支配を維持するために真実が隠されています。

結論：現代のカルーセルの解体

ガザ人道財団は、『ローガンの脱走』のカルーセルのように、慈悲を装った殺戮マシンであり、支配と暴力に根ざしています。その軍事化された援助配布システムは、パレスチナ人を致命的な儀式に強制し、生存の約束は死のリスクに覆われています。受給者を非人間化し、支配を集中化し、政治的目標に奉仕することで、GHFは人道支援をディストピアのスペクタクルに変え、それ自体が掲げる原則を損ないます。170以上のNGOと国連がその解体を求める中、カルーセルとの類似性は、尊厳、公平性、命を優先する本物の人道システムの回復の緊急性を強調します。『ローガンの脱走』の主人公が抑圧的なシステムからの脱出を求めるように、ガザの人々はこのディストピアの殺戮マシンの危険から解放された生存への道をふさわしく思います。